

---

 書 評
 

---

 Robert Kilwardby : *Quaestiones in Librum Tertium  
Sententiarum. Teil 1 : Christologie,*

Hgg. von Elisabeth Gössmann

 (Bayerische Akademie der Wissenschaften. Veröffentlichungen der  
Kommission für die Herausgabe ungedruckter Texte aus der  
mittelalterlichen Geisteswelt, Bd. 10), München 1982, pp. 64\*+260.

K・リーゼンフーバー

中世の写本の批判的編集という仕事はその完成のためには多大の労力を要するきわめて困難な仕事であるが、それによってはじめて中世思想の歴史的・体系的研究に確固とした基盤が据えられるのである。そういったたゆまぬ仕事は、グラープマンの伝統を承けて、この数年来バイエルン学術協会におきシュマウス師の指導のもとに研究者グループの手で着々と進められてきた。既刊分の10巻の定本は13世紀と14世紀の重要な哲学的・神学的資料を公にしており、たとえばこれまでほとんど顧みられなかったズットンのトマス (Thomas von Sutton, 1315年頃没) やオイタのハインリヒ・トッティング (Heinrich Totting von Oyta, 1396年没) の著作などもその中には含まれている。

そのシリーズの一環をなす本書は、ロバート・キルウォードビー (1215年頃～1279年) の神学的著作の中心にあたるもので、ペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』 *Sententiae* に対する彼の『問題集』 *Quaestiones* の第3巻第1部『キリスト論』のテキストを、綿密な校訂を加えかつ底本を明確に表示して紹介したものである。キルウォードビーはこれまでも文法学者や論理学者として、またプリスキアヌスやアリストテレスやボエティウスの哲学的注釈家として著名であり、彼の哲学的名著『学問の起源について』 *De ortu scientiarum* は中世盛期の代表的学問論と見なされてきたが、それに対し彼の神学的著作の方は彼と同時代の偉大なボナヴェントゥーラやトマス・アキナスの圧倒的な影響の影にかくれて今日まで看過されて

きた。しかしキルウォードビーが神学史上重要な意義を占めていることは、1277年に219の命題に対してなされたパリの禁令に続いて、その10日余りのちに新たに30の命題に対する禁令、そのうちの幾つかの命題は彼と同じ修道会に属するトマス・アクィナスによって主張されていたものであったが、その後者の禁令を下してその後の数十年の思想史の展開に強い影響を及ぼしたその張本人こそ、キルウォードビーであったという事実からも窺い知ることができよう。

さて本書の編集は主として既に知られている3種の写本を底本にしており、それらの間には根本的な相違は見あたらない。だが他方ではそれらの写本の系統的関連は明らかでなく、したがって本書でのテキスト校訂にあたっては主に、意味のつながりや論理的な筋道といった内容上の脈絡がその編集の目安にされている。ところで本書の功績は何よりも、テキストを「問題」別にすぐに見てとれるように区分したことである。その際、底本とされた写本やF・シュテークミュラーの試みた区分に見られるような問題の番号の付け方の不十分であることも指摘される。(なお欲を言えば、序文(p. 37\*~p. 41\*)に提示されている従来の番号の数え方の表に、比較の便のために、さらにこの版で採用された数え方も並記してもらいたかった。)各問題は、しばしば「副問題」subquaestionesを畔って、きわめて入り組んだ構造を成しているが、それは編集者による序文(p. 17\*~p. 36\*)で詳しく分析され図表を用いて説明されている。さらにその序文では本文の内容面の各主題やその占める神学史的な位置についても簡単に触れられているが、最後に、キルウォードビーの論理的・存在論的思索の一例として、「位格」persona 概念をめぐる彼の考えが取り上げられている。

ところで本書に挙げられた本文は1252年から1254年にかけてキルウォードビーが講述したと思われる、『命題集』の各命題を逐一注解したようなものではなく、『命題集』から採られた幾つかの主題に対する「問題」に限定して論じられたものである。そういった主題の選び方とその論述仕方とはなお伝統的な枠組みを出ておらず、アウグスティヌス的な神学の伝統によって導かれている。それでも他方では、同時代の著作家たちへの(*quidam* とか *alii* とかいった)数多くの言及からもわかるように、キルウォードビーは彼の生きた時代の問題意識とも果敢に取り組んでおり、その際たとえばキリストの知識に関する問題にあたっては、アウグスティヌ

斯的な認識論と並んでアリストテレス的な認識論をも認めるに及んでいる。

キリストの受難をめぐる問題を彼は詳しく論じているが、彼はそれを独特な仕方  
で救済論の問題と結びつけている。その際彼は、トマス・アクィナスの主張でもあ  
った、無限の贖いの必要性という説を退ける。すなわち、罪が被造者のなす業であ  
るかぎりそれは有限的なものの領域を出ないのであって、有限な贖いがあれば充分  
だとされる。さらに人間は自分の罪の償いを果たすことができ、それだからこそ、  
たとえキリストによる救済は依然として必要であるにしても、もはや無限の罰を科  
せられる理由はないと言われる。こういった彼の主張は序文において(p. 44\*, 45\*)  
人間とキリストとの協働という意味で解釈され、盛期スコラ学思想を越える進歩  
として評価されているようであるが、そうだとすればそこには異論の余地がありは  
しないだろうか。というのもキルウォードビーによれば、罪の償いが果たされるの  
はキリストの受難への信仰と希望に拠るのであって、したがって人間による罪の償  
いがキリストの受難を補うような意味でそれと並び立つわけではない。さらに罪の  
償いということは、彼によれば、その根拠を神によって授けられた恩恵のうち  
に有するのである。ここでは現代的に解された人間の自律的能動性のようなものが唱  
えられているのではなくて、キリストの功德に或る意味でまさる（旧約にも示され  
ていたような）神の恩恵といったものが説かれているのではないだろうか。

キルウォードビーにとっては罪からの解放ということよりも肝心なのは、人間が  
恩恵の境位にまで高められることである。彼にはキリストの受難における功德は  
「条件を充たすための原因」*causa dispositiva* (p. 47 l. 225) にすぎない。という  
のは恩恵とは神からその無限な力に基づいて「無償で」*gratuito* (同, l. 219) 授け  
られるものだからである。しかしキリストの受難によってもたらされる救いの到来  
ということは、そういった類の表現では十分に言い尽せるものではないだろう。そ  
れに関連して彼のキリスト論には、ロンバルドゥスの『命題集』の方には第3節と  
第17節に納められていた、救済論にとっても教会論にとっても重要なキリストの意  
志やキリストの恩恵に関する教説ももはや見あたらない。他方積極的な面から言え  
ば、そこには、神がキリストの受難をとおして贖罪をするのは、往々にしてアンセ  
ルムスの贖罪説に対する幾つかの解釈に見られるような、あたかも外から、被造者  
の側からの適度の功績によるかのようになすのでなくて、測り知れない寛大さから

そうした救いを与えるのだという、そういった洞察が反映していると言えるだろう。キルウォードビーの恩恵論のいっそう周到な分析の課題となるものは、したがって、そこに響いているのが前期スコラ学の比較的未発達な恩恵の余韻にすぎないのか、それとも、次の世紀に至ってウィリアム・オッカムの目ざすようになる、救いの業における神の自由で無限な力の強調といったものの先触れであるのかを、はっきり見極めることであろう。

ところで編集者による序文の最後の箇所にはキルウォードビーのキリスト論における「位格」概念が検討されているが、彼のそうした位格の分析は、13世紀以来普通そうであったように、「個であること」*singularitas*・「他のものの部分となり得ないこと」*incommunicabilitas*・「卓越した尊厳を有していること」*supereminens dignitas* という3つの特性に則して進められており、明らかにまだトマス以前の段階に留まっている。彼によれば、キリストの人性は質料が形相（靈魂）から規定され、形相が質料から逆規定されることによって個たらしめられる。だがまだそれだけでは、それは位格概念の意味では完全な個ではない。なぜなら、もっと高次の究極的形相である神性と結合してはじめて、最高の尊厳を備えた独立した個、すなわちキリストの位格は成立するからである。序文においても正しく指摘されているように、既にこうした論旨からも、1277年の彼の下した禁令の要目であった形相多数説が充分練り上げられてきていることが見てとれる。キルウォードビーは形相多数説をキリスト論の面から考えすすめており、そのため彼にはその説が2つの本性（形相）の位格的統一という教会の教義から保証されたものと思えたのであろう。そういった経緯を念頭におくなら、彼が何故トマスの実体形相の単一説を信仰に危険なものとして1277年の禁令で禁止したのか、その理由を推し量ることも難しいことではないだろう。（なおその際キルウォードビーは、トマスの形相単一説が位格概念に関するものではなく、自然物の実体構造の解明を目ざすものであるということに思い及ぶには至らなかったかも知れない。）

彼はまた身体から離存した靈魂を人格と呼びうるか否かを詳しく論じている。この問題をめぐる彼の考え方は妥協的で折衷的な態度に傾いている。彼は一方でロンバルドゥスのプラトンの・精神本位的な見解に対して、トマスがそれをきっぱりと退けているようには、それほどはっきりした反対を唱えず、他方では原則的に、身

体と結合した靈魂だけが人格であるという、彼の時代には既に一般的となっていた見解に同意を示している。ここでもキルウォードビーは彼の幾つかの教説においても見られるように偉大なる大全の盛期スコラ学における前段階の位置を占めているのである。それゆえ、キリスト教の人間像の哲学的構築を目ざす途上において、前期スコラ学の問題提起と盛期スコラ学におけるその円熟した解決とを連結する役割りを担う彼の著作を公にしたという、まさにこの点も本書の大きな意義のひとつであると言えるだろう。

(酒井一郎訳)

---

Martin M. Tweedale : *Abailard on Universals*.

North-Holland Publishing Company, 1976, pp. 337

清水哲郎

本書の主題は書名から明らかである。著者トゥイーデイルはアベラールにおける普遍の理論に迫るべく、テキストとその英訳をかなり長く提示し、その論述についてディスカッションを展開する、という仕方論を進める。それは著者が読者に対して一方的に主張を述べるのではなく、読者（ラテン語に通じていない読者も含む）が著者と共にアベラールのテキストそのものに接するためである。それによって読者はまた、ディスカッションの参加者となるように誘われているのである（現にこの書評の姿勢がその誘いの一つの結果にほかならない）。さらにそのディスカッションは、テキストを観察する途上におけるものというよりは、アベラールのディスカッションに著者自ら参加し、アベラールの問題を著者も問題にするという態度においてなされる。

問われている事柄の故に第一章、第二章はプラトン、アリストテレスおよびポルフィリオス、ポエティウスにおける問題の現われにあてられる。それは確かに概観には違いないけれども、単にこの種の研究書の定石に従ってなされたものに過ぎな